環境事始　　六帖　　富山公害デパート

ある日突然先生は転勤を下命されて富山に赴任した。北川徹三先生に挨拶すると、富山には幾らも仕事があるから心配いらぬと励まされた。世界を震撼させたイタイイタイ病は既に裁判が結審に向かっていて、先生の関与はなかった。しかし確かに凡ての化学汚染が揃っており忽ち騒動に巻き込まれた。富山化学から塩素ガスが漏洩して千人が避難した。燐化学は黄燐を流して下流の橋桁が燃えた。日産化学は真っ赤な過酸化窒素を放出して周囲 1 キロの屋敷林が枯れた。そして先生が夜行で東京に出張した折、隣のグリーン寝台で日産化学の役職が「枯れた屋敷林は拙いから県に言付けて早く伐らせよう」と相談していた。先生は最も危険な人物、時代劇で悪徳商人の密談を天井裏で忍者が聴いている場面とそっくりだった。十条製紙は十分毎に悪臭蒸気を噴出し、こういう捨て方で住民に最大の被害を与えていた。日本ゼオンは塩ビ廃液を小矢部川に捨て、その河口底は扇形に黒いヘドロが堆積しているのが、YS-11 機から見えた。高岡では庄川は上水、小矢部川は下水と役割分担させていたのだ。富山電工はマンガン鋼の精錬で粉塵を撒き散らす。先生は梯子を持って民家の屋根樋の泥を採取し、南北 1 キロに亙る Mn 汚染の分布を明らかにした。その図が新聞に出て、工場は除塵対策をしたため資金切れで倒産した。放生津潟を潰して誘致した住友アルミは弗化水素を排出、草木を枯らし、大喧嘩してやっと立ち入り調査した。しかしアルミ精錬は時代遅れ、九年間黒字を計上せずに廃業した。亜鉛精錬の日本鉱業脇の黒部駅に積もった粉塵から Cd 50%を検出した。富山短大の高倉盛安助教授が県に貰った原子吸光装置で廃水中の Cd を測定して、これが基準値、これが廃水で振切れているとテレビ発表したから、県は怒り心頭、十年教授昇進がストップした。工場の方は停止処分を食らった。経緯があった。ある時名古屋通産局が富山県は事件が多発だが国には何の報告もないと糾問に来た。この時県庁には課長をやり、部長は密かに先生達と会った。「なに、公害の事実があれば直ぐ営業停止にしますよ」と宣った。更めて権力の凄さを認識した。通産の部長は知事などより数段力が上だったのだ。その頃一寸顔を貸せと高級料亭に誘われ、大企業の面々「ま、お近付きに」と酌をする。事態を悟ったので宴酣に茶目を起こして、「そう言えば名古屋の中屋敷君がね・・」とやったら間髪を入れず一座冷水を浴びた如くなった。馬の骨の若造が通産の中枢と通じていたとは。宴会はそれでお開き。福寿製薬は更に特別。神通川に水銀があると厚生省の調査が入り、岐阜県まで調べて不明で打ち切った。翌日熊野川に製薬工場がエチル水銀を流したと露見。騙されたと国は先生に調査を命じた。見ると側溝はピカピカで水垢すらなく、川半分は藻も生えてない。一日置いて準備万端来て唖然、川底数百米重機で浚い尽くして証拠隠滅がされていた。国に抵抗した県の仕業であった。かくて稀少なエチル水銀汚染の実態は謎のままになった。立山アルペンルート更に儲けようと千寿の崖に有料道路を数十億円かけて建設。しかし国立公園だから厚生省は県を介してアセスを依頼した。先生心得て 2700 米の高原はこれ以上車を走らせれば自然破壊は必至也と報告した。これで県の目論見はストップ、今に立山杉も這松も健在、雷鳥も姿を見せる。若しかしたら、富山時代半休先生唯一の功績だったかも知れない。